２０１９年度
大学院奨励研究員研究報告書

2020年　3月24日

関西学院大学学長　殿

奨励研究員

氏　　名	生井　達也　　印

指導教員

所属・職名	社会学部　教授
氏　　名	古川　彰　　印

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	音楽実践の場が作り出す自律と連帯についての人類学的研究
採用期間	２０１９年　４月　１日　～　２０２０年　３月３１日

研究科委員長・研究科長印	事務局印

提出先：　所属研究科事務

研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）

（１）学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）

雑誌論文	著者名		論文題目			
	雑誌名			巻号	発行年月	掲載頁

雑誌論文	著者名		論文題目			
	雑誌名			巻号	発行年月	掲載頁

図書	著者名		論文題目		
	書名			発行年月	頁
					総頁：
					担当箇所：

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

（２）学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）

学会名	日本文化人類学会 第54回研究大会	開催地	早稲田大学戸山キャンパス（東京）
題目	日本の小規模ライブハウスにおける〈その場〉――ライブ・パフォーマンスへの「参与」についての一考察	発表年月日	2020年5月31日

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

研究経過状況（３０００字程度）

2019年11月29日に博士論文を提出し、2020年2月16日に博士学位（社会学）を取得した。以下では、博士論文「ライブハウスにおける音楽を介した『新たな価値』の創造をめぐる人類学的研究――流動空間に『生きられる場』を築くこと」の概要を示す。

第1章では、先行研究や関係資料において示されてきた日本におけるライブハウスの変遷の中で、ライブハウスという場がどのように意味づけられていったのかを社会の変容とともに分析していった。その意味づけの変遷では、ライブハウスは、メジャーに対するカウンター・カルチャーの場として位置づけられ、1980年代以降にロックが音楽産業のひとつとして定着すると、ライブハウスはアマチュアにとっての「メジャーへの登竜門」という位置づけがなされた。このようにライブハウスとは、メジャーに対するある種の補完的な役割を果たすものとしてその文化的意義が付与されてきたのである。さらに、音楽機材の発達とインターネットによる流通、配信などが進展した2000年以降の音楽活動の個人による経済的独立化と脱場所化の流れの中では、主に無名のアマチュア・ミュージシャンやその客にとってライブハウスは非合理的な演奏空間とされ、中心に対して何の役目も果たせない、文化的意義を喪失した場として批判されていった。

このような意味づけは、音楽産業の変化だけでなく、その社会背景の変化によっても影響されていた。雇用の流動化を推し進めるネオリベラル経済による社会の不安定化の中でフリーターが社会的に問題視されるようになると、ライブハウスでチケット・ノルマを払いながら出演する人々は、自主的にフリーターを選び「夢」のために搾取される無知な愚か者として表象されるようになる。そこではライブハウスは、「夢」を食い物にする経営者による商業施設として描き出される。つまり、現在のライブハウスに関わる主なアクターをめぐっては、店側の人々は出演者を搾取する悪者として、出演者は無知な被害者として、客は出演者目当ての「身内」や「同業者」として描かれ、閉鎖的な関係性によって成り立っている場としてライブハウスが論じられた。それゆえに、このような一方的な見方に回収されない実態を解明することが本論文の目的に据えられた。

第2章では、実際の個々のライブハウスはどのような場になっているのかの見通しを述べられる。まず先行研究ではライブハウスを画一化させると考えられていたシステムがそれぞれのライブハウスによって柔軟な在り方をしており、それは単に店側の経営方法というだけではなく、出演者や客というほかのアクターとのかかわりの中で変容していくもののとして存在していた。また出演者たちが何を目的にライブをしに来るのかという点も複雑性をもっていた。それは、先行研究で言われているような仕事、趣味、そして「夢追い」のためという明確な意識に基づかない目的も多く、そうした意味でも「上からの」意味合いとはズレをもつ。それは、ライブハウスという場が生産／消費という二元論的な価値観だけで支えられていないことを示している。多くのライブハウスで「上からの」視点からは不可視化されている実践、すなわち先行研究や批判的言説が立脚するような価値とは異なる価値をその内部において創造している潜在性があることが想定できる。

第3章から第6章では、ライブハウスに関わる人々によるシステムの変容や、ライブハウスで作られる人間関係を通じた実践をより具体的に検証するため、それを端的に示すモデルケースとしてライブハウスHOLを取り上げた。HOLは、80年代以降のライブハウス・システムを取りいれている小規模ライブハウスであり、出演者の身内やミュージシャンなどの同業者が主な客となっているが、その中でもイベントにほぼ毎回来るような〈常連〉と呼ばれる人々が20数名おり、彼らの存在によってほかのライブハウスとは違う独特な場所として特徴づけられていた。HOLではチケット・ノルマなどのシステムが柔軟性をもつことで〈常連〉と呼ばれるような継続的にそこに出演し客として身に来るミュージシャンを作り出しているということであった。そして、そのようなミュージシャンの客も、彼らが継続的に出演することで、ほかの客や出演者とも関係性が作られ同時に根付いていった。

第4章では、そのように場に根付いた〈常連〉たちがどのようにHOLという場を再生産しているのかを検討している。〈常連〉たちにとって、HOLという場は一時的にライブをする／聴くためのただのライブハウスではなく、ライフイベントも含みこんだ場所となり、生活の中心となっていた。そこからは、ライブハウスという場の多義的なものとする人々の実践が確認できるだろう。このようなHOLに継続的に来続けることで作られた〈常連〉たちによる関係性のあり方は、継続的な付き合いの上で醸成される相互理解の上に作られた共同性を有した「共同体」の在り方を示しているとも指摘できる。

第5章では、〈常連〉たちを中心としたHOLにおける経済的実践に焦点を当て、〈常連〉と店、〈常連〉同士の間の金銭のやりとりを検討していった。その結果、HOLでは一見さん的な客や出演者からのチケット代やノルマを通して一定の収益を上げ経営を安定させている一方で、〈常連〉たちが金銭を必要としない相互扶助を行うだけでなく、表現や作品への尊敬を示すための金銭の授受を行い、HOLを自分たちが楽しめる場として維持していたことがわかった。それは「市場交換に見せかけた贈与交換」とも呼べる異なる交換形式のブリコラージュと呼べるような実践であった。こうした実践は、グレーバーが「個人的コミュニズム」という概念で示したような互酬性の否定とも言い換えることが可能である。このようにHOLでは、金銭やそれを払うという行為に付与されている意味や価値を、互酬性を否定するものとして利用することで、親密な関係性にある者同士がお互いのミュージシャンとしての単独性を認め、その関係性における適度な距離を保つ実践になっていた。

第6章では、HOLをという場を支える主なイベントである、〈常連〉たちが出演し、それを〈常連〉たちが客として見に来るブッキング・イベントに着目した。そのイベントの中で何年にもわたり継続＝反復されてきた〈常連〉のライブにおける盛り上がりの揺らぎと〈常連〉同士のライブへの評価から立ち上がる〈その場〉がどのようなものなのかを検討した。そこから明らかになったのは、〈常連〉の出演者、客、そして店長やスタッフといった店側の人々によって、反復されてきた〈常連〉のライブとそれまでの継続的な付き合いを通して作られた相互理解ないし評価を参照しながらも、新たな文脈を作り出していくような差異が相互作用的に作られているということであった。そのような差異によって、HOLという場が活性化され再生産されることが可能になっているのである。そのような差異の生

成の基盤となっていたのが〈ちゃんと〉という彼らの語りであった。それは、それぞれのアクターがお互いの立場において〈ちゃんと〉ブッキングする、〈ちゃんと〉演奏する、〈ちゃんと〉観る（聴く）という実践を指していた。このような〈ちゃんと〉は、システムから押し付けられた規範ではなく、〈常連〉らが自発的・主体的に場に参与し、お互いの単独性を示すためのハビトゥスとして身体化したモラリティと換言できるだろう。そうしたモラリティは、第5章における金銭のやり取りにも見出せる。また第6章においては、店長の存在の重要さが改めて浮き彫りになった。それは、店長が、演奏者、客、スタッフという三つの役割を持ち、〈常連〉たちに対して権威的でありながらも水平的という包括的な存在であり、彼の実践が〈ちゃんと〉というモラリティを醸成させるある種の見本となっていることであった。また同時に、店長が〈常連〉をはじめとするHOLの内部的な部分とメジャー系やカリスマ的ミュージシャンとのつながりを持つ両義的な存在であることが場の全体を活性化する起点となっていたのであった。

このように、これまで不可視化されていたライブハウスにおける〈近傍〉と〈ローカリティ〉の生産を端的に示す事例であるライブハウスHOLでは、店長を中心とした〈常連〉たちのモラリティによって経済的にも維持されるとともに活性化された場として再生産されていたということが明らかにされた。

以上の内容の博士論文の提出および博士学位取得は、当該制度によって可能となった。ここに記して感謝を申し上げたい。

以　上